

デポジット制の生物分解紙コップでグリーンなライフスタイルを

おしゃれなリユースコップ「ハノチーノ」

北ドイツのハノーファー市は使い捨てコップのごみを減らそうと、2017年よりリユースコップ「ハノチーノ」を導入している。赤地に黒でハノーファーの風景を描いたおしゃれなコップで、今では5万個以上が出回っている。ドイツの環境賞「グリーンテックアワード」のライフスタイル部門で受賞するなど、注目が集まっている。文・田口理穂

ハノーファー市独自の リユースコップを開発

紙コップのコーヒー片手にさっそうと街を歩く様子は、ドイツでも日常の風景となった。ドイツでは年間30億個の使い捨てコップが消費されており、年々増えつつある。人口52万人のハノーファー市でも年間1,800万個が消費されており、市は少しでも減らそうと公共清掃団体アハとともに独自のリユースコップを開発した。2017年8月に地元サッカーチーム「ハノーファー96」の試合で初めて使用されてから、現在は市内165ヶ所のカフェや売店、催し物会場で扱っている。コップのデポジットは2ユーロ(250円)で、提携しているお店ならどこでも返却できる。2019年2月には蓋も登場し、これでコーヒーをこぼしたり、早く冷めることなく持ち運びができるようになった。蓋は別途2

ユーロで、コップと合わせると4ユーロ(500円)のデポジットとなる。コーヒーの使い捨てコップは、外は紙だが、内側はプラスチックの膜が張られているためリサイクルは難しく、多くが焼却されている。アハによると、道路のゴミ箱のごみの半分は紙コップだという。多くの人が手軽に紙コップでコーヒーを買い、何も考えずに捨てている。これはごみの問題だけでなく、エコロジカル、経済、社会、政治、文化的要因を包括する消費スタイルの問題である。

デポジット制で回収率が向上

ハノチーノのコップは大方がバイオポリマーや天然樹脂、セルロースなど生物分解できる素材で作られている。食器洗浄器で100回洗浄しても問題なく、公的試験機関であるTÜV Rheinlandによると250回洗浄しても最低限の変化しかみられなかったという。コップは壊れたり汚れたりしても、店に戻せばデポジットが戻ってくる。蓋つきで4ユーロというデポジットは高価に感じられるかもしれないが、だからこそ不用意に捨



ビビットな蛍光オレンジがおしゃれ「ハノチーノ」

てたりせず店に戻されるという効果がある。ハノチーノは、ハノーファーとカプチーノをかけあわせて命名した。ハノーファーの取り組みをまねて、ポツダムでもポツダム市民財団が同様のコップ「ポツプレッソ」の取り組みを始めている。プラスチックや使い捨てのごみが深刻な問題となっている昨今、リユースコップの取り組みは楽しみながらごみを減らす方法として普及が期待できそうだ。

「ハノチーノ」の公式サイト
<http://hannoccino.de>

田口理穂氏(たぐち・りほ)

在独ジャーナリスト。ドイツ裁判所認定通訳。日本で新聞記者を経て、1996年からドイツ在住。ハノーファー大学社会学修士。「EU Mag(駐日EU代表部公式マガジン)」「SpeakUp Overseas」「オルタナ」「週間金曜日」「アエラ」など様々な媒体に、ドイツの環境や教育、社会、経済について幅広く執筆。市民団体「ごみ環境ビジョン21」にドイツ便り(<http://gomikan21.com/rihodoitueko.html>)を2001年より書いている。著書に「なぜドイツではエネルギーシフトが進むのか」(学芸出版社)、「市民がつくった電力会社 ドイツ・シェーナウの草の根エネルギー革命」(大月書店)、共著に「お手本の国のウツ」 「ニッポンの評判」(共に新潮新書)。視察のコーディネートや通訳もしている。



ハノーファー市内165ヶ所のカフェや売店、催し物会場で利用できる